

唐津焼 神谷窯
絵唐津木賊文茶碗

高さ9.1 口径12.5 高台径4.8 桃山―江戸時代 16―17世紀
【木賊/とくさ】
木賊は、古来より観賞植物として庭に植えられるほか、秋に刈り取り、茎を煮て乾燥させ、研磨材としても用いられてきました。漆器の木地やつげ櫛の歯などの木製品の加工や仕上げ、爪磨きなど、つまり「天然のやすり」として使われることから「研ぐ草」を語源とします。「木賊刈る」で「仲秋」の季語。

唐津焼
奥高麗茶碗 銘 閑窓

高さ9.7 口径15.7 高台径6.1 桃山―江戸時代 16―17世紀
【雁/がん】
銘の「閑窓」というのは、「人里離れた侘び住まいの窓」という意味です。おそらく銘をつけた人は、この茶碗に描かれた文様や釉色を、晩秋の夕暮れに飛ぶ一羽の雁と見たのでしょう。夕暮れに「グアングァン」と寂し気に鳴く一羽の雁を、人里離れた草庵から独り眺める―。寂寥感に誘う銘です。「晩秋」の季語。

現川焼
刷毛地色絵抱銀杏文輪花皿

高さ4.7 口径18.5 高台径9.6 江戸時代 17―18世紀
【銀杏/いちじょう】
晩秋になると街路樹の銀杏が街中を黄色く染めます。銀杏には多量の水分を含むことから、火の延焼を防ぐために神社仏閣などに植えられているようです。この皿は縁の輪花状の形を利用して、黄色く色づく前の銀杏の葉をうまく表現しています。銀杏は「公孫樹」とも書くように、公（父）が撒いて、孫の代で実ができることから、長寿や繁栄を意味します。「銀杏散る」で「晩秋」の季語。

現川焼
打刷毛目色絵草文四方皿 五口

高さ4.5 口径19.0 高台径7.5 江戸時代 17―18世紀

八代焼
象嵌菊唐草文四方鉢

高さ4.3 縦23.8 横24.6 江戸時代 17世紀
【菊/きく】
九月九日は「重陽の節句」。中国の陰陽思想では、偶数が陰、奇数は陽とし、陽の数である「九」が月と日で重なることから、九月九日を「重陽」といいます。中国ではこの日に邪気を払い、無病息災や長寿を願って菊の花を飾ったり、菊の花びらを浮かべた酒を酌み交わす風習があります。この風習が日本に伝わり、宮廷行事に取り入られます。「三秋（初秋・仲秋・晩秋）」の季語。

冬

現川焼 観音下窯
染付人参文皿 五口

高さ4.7 口径18.5 高台径9.6 江戸時代 17―18世紀
【人参/にんじん】

この皿の人参は、「白人参」といわれるものです。江戸中期に編纂された日本の百科事典『和漢三才図会』によると、江戸時代に栽培されていた人参の根の色は赤、紫、黄、白としています。このうち赤色の人参は京都の「金時人参」、黄色の人参は沖縄の「島人参」が有名ですが、紫色の「黒人参」や白色の「白人参」は近年はあまり栽培されておらず珍しいようです。「三冬（初冬・仲冬・晩冬）」の季語。

唐津焼 道納屋谷窯
絵唐津点文茶碗 銘 那須野

高さ7.5 口径11.1 高台径6.0 桃山―江戸時代 16―17世紀
【霰/あられ】
箱書によると「那須野」の銘は、「もののふの 矢並つくるふ 籠手のうへに 霰たばしる 那須の篠原（源実朝『金槐和歌集』）」から付けられています。霰が降りしきるなか、那須の篠原で狩りをする武士が次の獲物を狙うまでのわずかな間、馬上で背中へ背負った矢を並び直している情景を詠んだ歌です。茶碗の胴に描かれた点文を霰に見立て、狩場の凜と張り詰めた雰囲気と霰が音を立てて激しく降りしきる情景が重なった「もののふの…」の一首を連想したものです。「三冬（初冬・仲冬・晩冬）」の季語。

唐津焼 小森谷窯
皮鯨ぐい呑

高さ5.7 口径7.5 高台径3.7 桃山―江戸時代 16―17世紀
【鯨/くじら】
唐津焼のなかで口縁の周囲にぐるりと鉄釉を施したものを「皮鯨」といいます。それがあたかも鯨肉の断面に似るためですが、特にぐい呑は「鯨飲（鯨が大きな口をあけて海水を飲み込むように酒をたくさん飲むこと）」に通じるとして酒豪に喜ばれたぐい呑です。日本人は古代から捕鯨し、鯨とは長い歴史がありますが、鯨を漁業の神である「恵比寿」の化身と考え、神格化していました。「三冬（初冬・仲冬・晩冬）」の季語。

唐津焼 内田皿屋窯
絵唐津網干千鳥文火入 一對

高さ11.8/10.0 口径4.8/4.2 桃山―江戸時代 16―17世紀
【千鳥/ちどり】
冬の漁村―。漁を終えた漁師が浜辺に網を干し、そのまわりに千鳥が飛び交う。この光景を文様化したものを「網干（あばし）千鳥文」といい、絵画や着物、工芸品によくみられる文様です。千鳥を単体で文様に用いるのは平安時代からですが、「網干」と組み合わせるのは室町時代以降に流行します。「三冬（初冬・仲冬・晩冬）」の季語。

志賀焼
御本立鶴写茶碗

高さ6.8 口径9.9 高台径4.8 江戸時代 18―19世紀

唐津焼 小田志山窯
三島唐津立鶴文大平鉢

高さ6.0 口径38.4 高台径14.4 江戸時代 17世紀
【鶴/つる】
「鶴は千年、亀は万年」ということわざがあるように、鶴は長寿の象徴とされます。また、鶴の鳴き声は高く、よくとおることから、天と地をつなぐ鳥ともいわれます。そして、鶴はつがいになると生涯相手を変えないことから、夫婦円満の象徴として尊ばれてきました。「三冬（初冬・仲冬・晩冬）」の季語。

〒810-0051 福岡市中央区大濠公園1-6
TEL 092-714-6051（代表） FAX 092-714-6071
www.fukuoka-art-museum.jp

た なかまる
田中丸コレクション うつわ歳時記

会期 2020年4月14日|火|-2020年6月14日|日|

会場 古美術企画展示室

共催 一般財団法人田中丸コレクション

日本の文化をみると、衣食住や年中行事に加え、詩歌、絵画、工芸のほとんどが四季を軸に展開していることがわかります。

日本人は春夏秋冬それぞれの季節を五感（視覚、聴覚、触覚、味覚、嗅覚）で感じとり、敏感にその気配や美しさを味わい、表現してきました。

今回は「うつわ歳時記」と題して、器の文様、形、銘のなかから季語を拾い集め、それらの意味や由来をみていきます。

〔一般財団法人田中丸コレクション 学芸員 久保山炎〕

季節		旧暦 (太陰太陽暦)	新暦 (太陽暦)	二十四節気(令和二年 /2020 年版)		
春	初春	睦月(むつき)	2月	立春(りっしゅん)	春の気配が感じられる	2 月 4 日
				雨水(うすい)	陽気がよくなり、雪や氷が溶けて水になり雪が雨に変わる	2 月19日
	仲春	如月(きさらぎ)	3月	啓蟄(けいちつ)	冬ごもりしていた地中の虫がはい出てくる	3 月 5 日
				春分(しゅんぶん)	太陽が真東から昇って真西に沈み、昼夜がほぼ等しくなる	3 月20日
	晩春	弥生(やよい)	4月	清明(せいめい)	すべてのものが生き生きとして、清らかに見える	4 月 4 日
				穀雨(こくう)	穀物をうるおす春雨が降る	4 月19日
夏	初夏	卯月(うづき)	5月	立夏(りっか)	夏の気配が感じられる	5 月 5 日
				小満(しょうまん)	すべてのものが次第に伸びて天地に満ち始める	5 月20日
	仲夏	皐月(さつき)	6月	芒種(ぼうしゅ)	稲などの穀物を植える	6 月 5 日
				夏至(げし)	昼の長さが最も長くなる	6 月21日
	晩夏	水無月(みなづき)	7月	小暑(しょうしょ)	暑気に入り梅雨があける	7 月 7 日
				大暑(たいしょ)	夏の暑さがもっとも極まる	7 月22日
秋	初秋	文月(ふづき)	8月	立秋(りっしゅう)	秋の気配が感じられる	8 月 7 日
				処暑(しょしょ)	暑さがおさまる	8 月23日
	仲秋	葉月(はづき)	9月	白露(はくろ)	白露が草に宿る	9 月 7 日
				秋分(しゅうぶん)	秋の彼岸の中日、昼夜がほぼ等しくなる	9 月22日
	晩秋	長月(ながつき)	10月	寒露(かんろ)	秋が深まり野草に冷たい梅雨がむすぶ	10月 8 日
				霜降(そうこう)	霜が降りる	10月23日
冬	初冬	神無月(かんなづき)	11月	立冬(りっとう)	冬の気配が感じられる	11月 7 日
				小雪(しょうせつ)	寒くなって雨が雪になる	11月22日
	仲冬	霜月(しもつき)	12月	大雪(たいせつ)	雪がいよいよ降りつもってくる	12月 7 日
				冬至(とうじ)	昼が一年中で一番短くなる	12月21日
	晩冬	師走(しわす)	1月	小寒(しょうかん)	寒の入りで、寒気がましってくる	1 月 6 日
				大寒(だいかん)	冷気が極まって、最も寒さがつる	1 月20日

※参考「こよみ用語解説」「二十四節気および雑節」国立天文台

作品リスト
※作品データの記載順序は、産地、作品名、寸法（cm）、時代、年代、季節、解説としました。
※桃山時代は美術史の区分に従い、室町幕府が滅亡する1573年から豊臣家が滅亡する1615年までとしています。

春

唐津焼　大草野窯
三島唐津茶碗　銘　蓬萊

高さ8.7 口径10.5 高台径4.7	江戸時代 17世紀
【蓬萊/ほうらい】	
古代中国では「東の海上に蓬萊、方丈（ほうじょう）、瀛洲（えいしゅう）という仙境があり、そこには仙人が住み、不老不死の薬がある」と信じられていました。実際に秦の始皇帝は、徐福に童男童女数千人を伴わせ、蓬萊山へ不老不死の薬を探しに行かせたと『史記』（中国最初の正史）はいいます。こうした神仙思想が日本にも伝わり、平安時代にはその蓬萊山をかたどった「蓬萊飾り」を酒宴や婚礼などの装飾として用いるようになります。この「蓬萊飾り」は洲浜の形をした台の上に松竹梅や鶴亀などの造りものを飾ったものですが、神の加護を期待し、神が天から降りてくるときの目印、つまり「神の依代」となっていくます。さて、この茶碗にはなぜ「蓬萊」という銘がつけられたのでしょうか？三島唐津や高麗三島の「三島」とは、象嵌文様が三嶋大社（静岡県三島市）の暦に似るためといわれています。おそらく、その暦の文様から新年のはじまり、そして神の依代としての蓬萊飾りを連想して命銘したのでしょう。「新年」の季語。	

薩摩焼　堅野系
染付松竹梅図茶碗

高さ8.8　口径13.0　高台径6.1	江戸時代　18世紀
【松竹梅/しょうちくばい】	
中国の文人画に好まれるモチーフに「歳寒三友（さいかんさんゆう）」があります。「松、竹、梅」もしくは「梅、水仙、竹」の場合もありますが、いずれも寒さ厳しい冬に絵のモチーフとなる三つの植物という意味です。中国では、厳しい寒さのなかでも青々として緑をたもつ松と竹、百花にさきがけて香り高く咲く梅に、苦勞の多い身の上にもかかわらず、毅然と信念を貫くという君子の理想像と重ねあわせました。この「歳寒三友」が日本に伝わりましたが、日本ではなぜか慶事の象徴となります。というのも、日本では松は古来より日本では神の依代とされており、常に青々としている姿から不老長寿。竹も古来より神聖な植物として神事に用いられてきましたが、その繁殖力から子孫繁栄。梅は他の花よりも先駆けて咲きまた菅原道真の天神信仰とも重なることで、出世や開運を象徴するようになります。「松竹梅飾る」で「新年」の季語。	

唐津焼　内田皿屋窯
絵唐津蔵文盃台

高さ4.1 径14.7 高台径5.4	桃山—江戸時代 16—17世紀
【蕨/わらび】	
春を告げる山菜といえば、ふきのとう、たらの芽、山うどぜんまい、蕨などがあげられますが、なかでも和歌にたびたび登場してくるのが蕨です。万葉集には「石走る垂水（たるみ）の上のさわらびの萌え出づる春になりにけるかも」という歌があり、意識すると「やっとこの山深い谷川も、早蕨（さわらび）が芽吹く春になったものだ」と、待ちわびた春を迎えた喜びを詠んだものです。芽を出したばかりの蕨を「早蕨」といい、先端がくると丸く渦巻状になった形をしています。まるで拳のような形をしているところから別名「蕨拳（けっけん）」ともいいます。この早蕨の形をした文様を「蕨手（わらびて）」といい、古墳時代の装飾古墳の壁画や刀の柄頭、桃山時代的美濃焼や唐津焼、江戸時代の尾形光琳の絵にもしばしばみられます。「仲春」の季語。	

薩摩焼　堅野系
茶碗　銘　若草

高さ7.5 口径12.4 高台径4.5	江戸時代 17世紀
【若草/わかくさ】	
「山笑う」という言葉があります。春になると森の樹木が芽吹きだし、山は冬枯れ色から一転して色とりどりに染まりはじめます。その様子が山が笑っているようだと表現したのですが、この茶碗の釉景色も土の中からちらほらと新芽が芽吹きだしているようにもみえます。あたかも若草が一斉に芽吹くように焼き上がった、薩摩焼では類例のない釉景色です。「晩春」の季語。	

現川焼
片身替打刷毛地藤文四方皿

高さ4.8 口径18.5 高台径10.9	江戸時代 17—18世紀
【藤/ふじ】	
毎年4月から5月にかけて見頃をむかえる藤の花。藤の花は、古来より縁起のよい花とされてきました。というのも「フジ」の音が、「不死」「不二」「無事」に通じ、また小さな花をたくさんつけることから、繁栄の象徴とされたからです。また、田植えの時期に咲きはじめ、房が垂れ咲く姿が稲穂を連想させることから、米の豊作を予兆する花ともされてきました。「晩春」の季語。	

唐津焼　坊主町御茶碗窯
土井唐津梅鶯文団扇形鉢

高さ4.3 径31.2×24.2 江戸時代 18世紀

【鶯/うぐいす】

「ホーホケキョ」と春を告げる鶯。最初はおぼつかないさえずりも、夏鶯になるころにはけたたましく鳴くようになります。日本人はそのさえずりを愛で、夏の時鳥（ほととぎす）、秋の雁（がん）同様、その初音をもてはやしました。「梅に鶯」の組み合わせは、もともと中国の花鳥風月を詠んだ漢詩に由来し、「松に鶴」「紅葉に鹿」「牡丹に唐獅子」と同様に「絵になる良い取り合わせ」「美しく調和するもの」という意味があります。「三春（初春・仲春・晩春）」の季語。

薩摩焼　堅野系
瓢形茶入　銘　玉水

高さ7.0 口径3.0 底径3.2	江戸時代 17世紀
【玉水/たまみず】	
田中丸コレクションには、小堀遠州が薩摩焼瓢形茶入を十個つくせられた内のひとつ「玉水」があります。この茶入はその写しとして作られたものです。「玉水」の銘は、『新古今和歌集』巻第一（春上）に載る大僧正行慶（1101—1165）が詠んだ和歌「つくづくと春のながめのさびしきは忍ぶに伝ふ軒の玉水」に由来します。意識すると「なんとなくぼんやりと物思いにふけりながら、春の長雨が降るのを眺めていると軒の忍草をつたって、ポトリ、ポトリと落ちる雨の滴に言い知れぬ寂しさが込み上げてくる」という物悲しい気持ちを詠んだ歌です。もともとなった茶入にも白釉のなだれがあり、これを雨の滴に見立てて行慶の和歌を連想したものです。	

現川焼
片身替打刷毛地忘貝文舟形皿　五口

高さ2.7 口径10.5 高台径4.5	江戸時代 17—18世紀
【忘貝/わすれがい】	
箱書には「忘貝」とあります。物悲しい名前の貝ですが、貝の種類ではなく砂浜に打ち上げられた貝殻のこと。この忘貝を拾うと、恋人を忘れることができるといわれたことから、別名「恋忘貝」ともいいます。	

唐津焼
絵唐津椿文輪花向付　五口

高さ3.8 口径10.4 高台径5.4	桃山—江戸時代 16—17世紀
【椿/つばき】	
木偏に春と書く椿は、文字通り春を代表する花です。椿といえば、咲き終わった花が根元からポトリと落ちることから武士たちは打ち首を連想させるとして忌み嫌ったという話をよく聞きますが、これは幕末から明治にひろがった誤伝だとか。実際は長寿のことを「椿寿（ちんじゅ）」というように、不老長寿を意味し、魔除けや神の依代となる神聖な花として尊ばれました。「三春（初春・仲春・晩春）」の季語。	

夏

唐津焼
重要文化財　絵唐津菖蒲文茶碗

高さ9.2 口径12.0 高台径6.3	桃山—江戸時代 16—17世紀
【菖蒲/しょうぶ・あやめ】	
古来より菖蒲のさわやかな香りには、邪気をはらう力があると信じられてきました。五月五日の端午の節句では、「菖蒲酒」や「菖蒲湯」、蓬（よもぎ）と菖蒲を束ねて軒先に飾る「軒菖蒲」という習わしもあります。実際に菖蒲の葉や根には、血行促進や疲労回復の効果があるようです。また、葉の形が刀に似ることや「ショウブ」の音が、「勝負」「尚武（武を重んじる）」に通じることから、武家の間でも尊ばれてきました。「仲夏」の季語。	

高取焼　内ヶ磯窯
藁灰釉緑釉流四方耳付水指　銘　若葉雨

高さ19.4 底径15.3	桃山—江戸時代 17世紀
【若葉雨/わかばあめ】	
白濁色の藁灰釉と緑色の銅緑釉が焼成の際に溶け出し、 幻想的な釉景色となった水指です。この釉景色があたかも雨に にけふる若葉を連想することから、「若葉雨」の銘がつけら れました。「初夏」の季語。	

現川焼
打刷毛目茶碗（蛭手）

高さ6.0 口径11.2 高台径4.4	江戸時代 17—18世紀
【蛭/はたる】	
胴にある丸い文様を現川焼では「蛭手」といいます。白土を置いたのち、細い竹で中心部に息を吹きかけたものです。その文様や技術は単純ながらも、不揃いに配置することで、あたかも夏の夜に水辺で飛び交う蛭のような幻想的な文様となっています。「仲夏」の季語。	

高取焼　大鋸谷窯
飴釉茄子香合　大休軒芳園子作

高さ6.9 胴径5.5	江戸時代 17—18世紀
【茄子/なすび】	
茄子はインド原産で、その後中国を経由して日本に伝わり、奈良時代にはすでに栽培されていたようです。日本人にとって身近な植物ですが、茄子といえば「一富士、二鷹、三茄子」という初夢に見ると縁起が良いとされることわざがあります。調べてみると、この三つの組み合わせは江戸初期にはすでに古文書に記されており、その由来にはいろいろな説があったようです。そのひとつが、徳川家康が駿河国で高いものを順にあげたとする説。つまり、富士山、愛鷹山、初茄子の値段。そのほかに最も知られているのが、富士山は「不死」「無事」に通じ、鷹は「高く飛ぶ」、茄子は「(事)成す」に掛けているという説があります。「晩夏」の季語。	

現川焼
吹刷毛地雲龍文四方皿

高さ5.0 口径18.3 高台径8.6	江戸時代 17—18世紀
【雷/かみなり】	
この雲龍文には雲と雷光だけで、龍がいることを暗示させています。というのも龍は天に昇り、雨雲を発生させ、雨を降らすと考えられていたからです。雷のゴロゴロという音は、龍の声だといいます。禅宗寺院に龍の絵が描かれるのも、水の神である龍が火事から守ってくれる火除けの意味や、雨の如く仏法が広がるようにという意味もあるようです。「雷」という字は「雨」が「田」に降り注ぐという意味があり、また雷光のことを「稲妻」というように、稲作と深い関係があり、昔から稲妻が多い年は豊作になるといわれています。「三夏（初夏・仲夏・晩夏）」の季語。	

高取焼　東皿山窯
黄釉白鷺盃洗　中川和三郎作

高さ12.9　口径19.4　高台径8.6	江戸―明治時代　19世紀
----------------------	--------------

現川焼
打刷毛地鶯文輪花皿　五口

高さ3.5 口径13.5 高台径7.0 江戸時代 17—18世紀

【白鷺/しらさぎ】

夏の田園や川の浅瀬にたたずむ白鷺。その立ち姿や飛ぶ姿が優雅なことから「岸辺の貴婦人」にも例えられ、古くから日本人に親しまれてきました。また、吉兆を告げる鳥としても知られます。織田信長が今川義元に奇襲をしかけた「桶狭間の戦い」で、決戦の前に熱田神宮で戦勝祈願をしたところ、白鷺が飛び立つのを見て、「勝機あり」と軍勢を鼓舞した話が伝わっています。「三夏（初夏・仲夏・晩夏）」の季語。

小代焼
伊羅保写茶碗　銘　石清水

高さ8.5 口径15.8 高台径6.1	江戸時代 17—18世紀
【石清水/いwashimizu】	
ぶつぶつと小砂混じりの茶褐色の肌から、青白く発色した藁灰釉がところどころになだれています。その様子があたかも岩陰から滲みでる湧水のようなところからの銘です。石清水以外にも、清水が湧き出す場所により、山清水、草清水、苔清水などといった言い方をします。「三夏（初夏・仲夏・晩夏）」の季語。	

秋

高取焼　内ヶ磯窯
掛分阿古陀形香炉

高さ11.0 口径6.7 胴径12.2	桃山—江戸時代 17世紀
【阿古陀/あこだ】	
阿古陀とは「阿古陀瓜」のことです。「阿古陀瓜」で辞書を引いてみると「金冬瓜（きんとうがん）の一種」で「金冬瓜はカボチャに類する」とあります。つまり、カボチャの仲間ですが、私たちが普段食べるカボチャではなく、観賞用のカボチャのようです。この阿古陀瓜の形は、武具や茶道具にも取り入れられ、兜や香炉、茶器にみられます。「阿古陀瓜」で「初秋」の季語。	

上野焼　釜の口窯
斑釉茶碗　銘　みやぎの

高さ7.6 口径15.0 高台径5.5	桃山—江戸時代 17世紀
【萩/はぎ】	
吉野山の桜、龍田川の紅葉、宮城野の萩というように、銘の「みやぎの」とは萩の名所で現在の宮城県仙台市を指します。おそらく藁灰釉の白濁した釉色から、一面に咲き乱れる白萩を連想したのでしょう。「初秋」の季語。	